



子どもたちにおはなしを届け続けて25年

おはなしのクレヨン

四半世紀にわたって



小さな子のための「おはなしポッケ」



小学校での読み聞かせの時間



小物も手作りです



月1回図書館で開催される「おはなし会」の様子

町立図書館での「おはなし会」の会場では、物語の中に入り込む子どもたちの眼差しと息づかいが感じられる。会場の中心で「素話」^{すばなし}をしているのは、今回の主役「おはなしのクレヨン」の会員である。語り手の手には絵本などは何もない。物語を完全に覚えているのだ。物語を自分の中でよく理解し、自分の言葉で語りかけて子どもに届けている。

「おはなしのクレヨン」は昭和61年から現在に至るまで25年間にわたり、図書館でのおはなし会や小学校での読み聞かせなど、子どもと本を結ぶ活動を続けている。現在、会員は21人。今年の4月には、四半世紀にわたる活動が認められ、「2012年度子ども読書活動優秀実践団体に対する文部科学大臣表彰」を受賞した。

おはなしのちから

代表の大澤さんは「絵本を見せる『読み聞かせ』と違い『素話』は、子どもたち一人ひとり受け取り方が違う空想の世界。自分で物語の景色を想像しながら、お話の中に入り込んでいくんです」と語る。また、あ

る会員の人は「子どもたちは実際の経験でもできないような体験を、物語の中で体験することがある。そのお手伝いができれば嬉しい」と語ってくれた。大人が発する生の声で語られる素話は、テレビやビデオとは異なり、想像することによって子どもの脳の発達や情緒的発達を促すことが知られている。物語には、広く知られているものでも、何度となく引き付けられる「ちから」があるという。会員の皆さんは「おはなしのちから」で毛呂山町の子どもたちの心の成長を見守っている。

子どもたちとの幸せな時間

「おはなしのクレヨン」の会員の皆さんは、いきいきと楽しんでそう。一つの物語を覚えることに苦労はつきものだが、子どもたちにつまみ届けられた時の良い反応を見ると、次のおはなしは何を覚えて、届けようかなという気持ちになるという。おはなしや読み聞かせをした子どもたちの母親から「いつもありがとうございます」と声をかけられたり、下校中の子どもに話しかけられたりするなど、新たな出会いもうれしいと語る。会員同士のつながりも「なんでも言い合えるすてきな関係です」

と皆さんいい笑顔を見せてくれた。あちらこちらの市町村、ときには県外までいろいろな「おはなし会」に出向き、見聞きし、技術の向上のため努力を惜しまない。子どもたちの笑顔のため、難しい本選びも、時間をかけ丁寧に行っている。

これからも続けたい

「おはなしのクレヨン」の活動は「おはなし会」のほかに、0歳から3歳くらいの小さい子のための「おはなしポッケ」や「大人のためのおはなしと絵本を楽しむ会」、「かみしばいらりー」など、活動の幅も広がっている。これまで楽しく続けられたのは、子どもたちや図書館の支えがあったからこそと、とても謙虚な会員の皆さんだが、「四半世紀を過ぎて、次は半世紀になるまで続けていきたい」と今後の活動について語ってくれた。そのために、次の世代へつないでいくことの必要も感じている。



おはなしのクレヨンのみなさん